

版法、質問紙法ともに達成動機得点の低下が逸脱傾向の増大と対応することが認められた。しかしどのような評価方式が最良であるかについては今後の資料を検討しなくてははっきりしない。

達成動機がパーソナリティ特性と深い関係をもつことについて、一応の見通しを得た。図版法と質問紙法との組み合わせについては今後の研究によって明らかにしたい。

### カウンセリングにおけるコミュニケーションに関する心理学的研究

研究代表者：佐 治 守 夫  
(東京大学)

#### 目 的

本研究は、カウンセリングにおけるコミュニケーションを、相互性に着目しながら、実験的に操作しうる形できとり出し、カウンセリングにおけるコミュニケーションの継時的変化を実験的にとらえることを主たる目的として実施された。

#### 方法と結果の概要

1. 面接場面における姿勢と動作：15のペア、延べ73回の実験的カウンセリングを実施し、動きの頻度に見られる諸傾向ならびに、それらと心理治療体験目録および治療関係スケールとの関係を分析した。

カウンセラーとクライエントの動作頻度は約3対4であった。体験目録と治療関係スケールにおいては、高得点群の方が低得点群よりも動作頻度数が高かった。さらに、両群の動作頻度のレンジは、面接の回を追うに従って、各ペアごとに収斂していくことが認められた。また、その推移は、高得点群では一貫性が認められ、低得点群では認められなかった。両群におけるコミュニケーション様式には相違が認められた(文献①②)。

2. 面接過程の評定：上記の実験的カウンセリングにおける体験目録と、関係スケールを分析した。その結果、カウンセリングの過程に関して、約3分の2の面接では、面接当事者の自己報告と、第三者による面接の評定がほぼ一致した。また、VTRを使用してもなお、面接過程を評定しきれない部分のあることがわかった(文献③)。

3. 上記の面接実験のための基礎的研究：カウンセリングにおける自己開放性の基礎的研究として、質問紙による研究が実施された。その結果、質問紙による自己開放性測定が、一定の条件では、従来いわれているよりも可能であることがわかった(文献④)。

また、カウンセリング過程の基礎的研究として、自己概念と適応の研究を行った。その結果、自己概念の低い

者は、情緒不安定性傾向が高く、社会的不適応性傾向が高いことなどがわかった(文献⑤)。

#### 文 献

- ① 佐治守夫、鶴養美昭「カウンセリングに関する実験的検討(Ⅰ)―非言語的な視点から―」東京大学教育学部紀要、第19巻、1980.
- ② 鶴養美昭「実験的カウンセリングにおける『動き』に関して」東京大学教育学部教育相談室紀要、第3集、1980.
- ③ 飯長喜一郎「実験的カウンセリングにおける体験目録と治療関係スケール」東京大学教育学部教育相談室紀要、第3集、1980.
- ④ 飯長喜一郎「グループ合宿における自己開放性」東京大学教育学部紀要、第17巻、1978.
- ⑤ 鈴木乙史「自己概念と適応に関する一研究」東京大学教育学部教育相談室紀要、第3集、1980.

### 「イメージ面接の精神生理学的分析に関する基礎的研究」

研究代表者：高 柳 信 子  
(文教大学)

1. 閉眼して浮かんでくるイメージを夢を語るように自由に展開させるイメージ面接は、通常の面接にくらべ感情体験過程が比較的抵抗なく展開すると言われている。イメージ面接時にみられる感情体験過程は情動そのものではないにしても、そのような時期の生理反応変化の観察は語られたイメージを分析する際の一助になりうるものと期待される。ここでは実験室的なイメージ面接場面を設定し、イメージ内容と生理反応の対応関係を検討するとともに、あわせていくつかの関連研究を行った。

2. 生理反応としては自律反応のうち、自発性の皮膚電位反応(SPR)を指標とした。被験者はvolunteerである女子学生1名。イメージ面接は標準型導入とし1回約30分間とした。1週間ないし2週間の間隔をおいて7回のイメージ面接が実施された。

3. 自発性SPRのデータをblindにしたまま、7回のイメージ面接を概観してみると、被験者にとって主要なテーマ(今回の場合は「死―再生―成長」)が一貫して存在していることがうかがわれた。そこで各回のイメージ面接記録を5分間単位に分割し、前述のテーマが中心に出現している部分を(+), また自己に関連付けられない表面的なイメージが語られている部分を(-)と評定してその時期の自発性SPR量と対応させた。その結果、評定と自発性SPR量の大小との間には有意な対応が認

められた ( $\chi^2=8.031$ ,  $P<0.005$ )。すなわち、イメージ面接中、被験者にとって中心的テーマの展開がみられる個所ではおおむね自発性 SPR の出現が多く、また自己とのかかわりの希薄なイメージの語られている部分では自発性 SPR の出現が減少するという結果を得た（こうした対応は、追加して行った他 1 名 5 回のイメージ面接データの同様の分析でも認められた）。また少数個所ではあったが、こうした対応に乖離の生じる部分が観察され、その意味について若干の考察が加えられた。

4. 上記研究の基礎研究として、バイオフィードバック法による SPR 感覚の研究が行われた。また関連研究として、イメージ面接によるロールシャッハテストスコアの変容についての研究、イメージの図式投影法及び箱庭人形劇の事例的研究が行われ、それぞれについていくつかの知見を得た。また今後のイメージ研究に向けて若干の論議が行われた。

#### 5. 学会発表

イメージ面接に関する基礎的研究 1) 自発性皮膚電位反応との対応 日本心理学会第43回大会 1979.

バイオフィードバック法による SPR 感覚の研究(1) 一自発性 SPR の弁別とその心理的手掛り一 日本心理学会第43回大会 1979.

### 双生児における対内差の発達心理学的研究

研究代表者：託 摩 武 俊  
(東京都立大学)

本研究は MZ (1 卵性双生児) 及び DZ (2 卵性双生児) のそれぞれ対偶者間に認められる差異を発達心理学的観点から研究することを目的とした。被験者の年齢により研究は 2 つの部分にわけられる。

#### I 乳幼児双生児

生後 2 か月より 24 か月にいたる期間、20 組の双生児 (MZ 10 組, DZ 6 組, PZ (異性双生児) 4 組) について主として社会的行動の発達を観察した。自然観察法に基づく縦断的研究を行うことが目的で、前記の約 2 か年間に 10 回の家庭訪問をした。観察は 1 回約 60 分で、乳児と保育者の日常生活場面でなされた。

観察項目は自発的微笑、非社会的微笑、社会的微笑、非社会的笑い、社会的笑い、非社会的発声、社会的発声、有意味語、模倣などである。上記で社会的というのは人に対して発現しているもの、非社会的というのは人以外のもに対して発現しているものである。また微笑は声を伴わないもの、笑いは声を伴うものである。そのほか

出生時体重、仮死度得点、保育器使用日数、入院日数などで出生時の基本的事項や、母親の双生児観、育児不安なども尋ねた。

MZ, DZ それぞれ対偶者間の差を社会的微笑、社会的笑い、発声、社会的発声の各出現頻度に関して比較した。生後 8 か月までの社会的笑い、また 8 か月から 1 年までの模倣行動 (シャンシャン、バイバイなど) には、MZ 間の差が DZ 間の差よりも少なかったが、他の行動にはこの傾向は見られず、むしろ出生時体重などの影響が、6 か月以前では示唆された。生後 15 か月以降では、有意味語発達で MZ 対偶者間の差は DZ より小さかった。

#### II 青壮年期双生児の研究

18 歳より 44 歳にいたる双生児 130 組 260 名 (MZ 113 組, DZ 12 組, PZ 5 組) についての質問紙調査である。

青年期の MZ は体格、顔立ちなど外見上の印象がよく類似しているために双生児であることが他人の目にとまりやすく、これを嫌ってなるべく離れて気づかれぬように配慮することもある。しかし MZ 相互の結びつきは DZ よりも緊密で相互依存的であるが、これがまた対立する原因にもなっている。双生児であるその意識は年齢とともに薄れるが、成人後も MZ は DZ よりも対偶者を、親、配偶者、他のきょうだい、親友など身近な人間の中で考える場合、より親しいものと考えている。自分から対偶者に働きかけたり、特別な親しみをもっているだけでなく、相手もまたそのように思っていると認知している。成人後も一般に双生児であることの影響は MZ の方が DZ より強く働いている。

本研究にあたっては須田治、川上清文、山本真理子、竹内ますみの各氏の多大な協力を得た。

### 長期記憶と短期記憶の関係に関する研究

研究代表者：梅 本 堯 夫  
(京都大学)

一般に短期記憶において深い水準の処理を受けたもの、すなわち周到なリハーサルを受けた情報が長期記憶に転送されと考えられているが、記銘材料や課題によって要求される処理水準は異なり、リハーサルだけが要因とは言えない。この研究ではまず記銘材料の性質と長期一短期記憶の関係を分析するため、13 種類の記銘材料 (片カナ 4 字、英語文、漢字 1 字、漢字 1 字ルビ付き、英単語、ひらがな 1 字、線画、ひらがな 4 字、日本語文、図形、漢字 2 字、2 けた数字、アルファベット 1 字) 各 10